

日本福祉大学 松本オフィス -第9号- 松本オフィス通信

発行日 2012年1月1日

INDEX

■ 東日本大震災支援	■ 北信越地域就職相談会	3
■ 長野県出身の学生奮戦記	■ 木之下晃氏 特別講義	4
■ 高遠の魅力を再発見!	■ 長野県人会 模擬店	4
■ 宮田村 協定10周年を経て	■ 障害者施設のアート展	5
■ 近藤直子副学長が講演	■ 長野県地域同窓会より	6
■ 福祉大卒業生はいま	■ 入試インフォメーション	6

東日本大震災支援 今できること、やらなければならないこと

3月11日に発生した東日本大震災に対し、日本福祉大学は3月14日、対策本部(本部長:加藤幸雄学長)を設置し、被災地の復興と被災者支援にむけて、学生、教職員、卒業生、広範な大学関係者のさまざまな知恵と力を結集してきました。



なかでも学生を中心とした現地支援の全学的な取組は、3月の先遣隊に始まり、4月の連休期間、夏休みへと継続され、岩手大学をはじめとした地元や全国の学生とも交流するなど広がりを見せてきました。

その中から、2011年8月16日に始まった夏の被災地支援の活動に参加した長野県出身の2人の学生を紹介します。



2人の学生が参加したのは宮城県石巻市。沿岸部の港は壊滅的な打撃を受け、8月半ばを過ぎた時点でも、ようやく道路から瓦礫が撤去されたものの、個々の工場、店舗、住居の復興にはほとんど手がついていない状況でした。

地域での暮らしの再建にあたって、私たちはどのように被災者と心をつなげていくのか、学生ができること、やらなければならないことは何か、被災地での活動を通じて学生たちが学んだこと、心に刻み込んだことは重く、さらに今後の継続した取り組みへとつながってゆくものでした。

東北支援プロジェクトに参加して -長野県出身の学生奮戦記-

その一方、生活を送っていくための日用品が不足していると思われました。ある老夫婦は「仮設に入る際に米を10Kg頂いたが終わってしまっ

た。被災者の方とお話をし、私は話を聞くだけで辛い思いになったのに、思い出すだけで痛い思いをするだろうに話してくださって、知らせてくださって、本当にありがとうございます。

2回目の宮城県石巻市での活動。今回は民家の片づけや仮設住宅で活動しました。

1回目のGW時と比べ、状況やニーズが違っていることを肌で感じることができました。その中でも、印象に残っていることは2つあります。

社会福祉学部社会福祉学科
3年 上野 温美



地面を掘っても掘ってもガラスが出てくる、流木を引っかくと緑色の土が出てくる、自分の「おうち」を無くなった子どもたちと遊ぶ、体育館で生活している人たちがいる、仮設住宅に扇風機を配ってまわる、普段は他の仕事をしている全国のボランティアの人たちと5日間共同生活を送る、どれをとっても、経験したことのない5日間でした。

強く感じたのは、震災での被害の大きさです。

また、がれき撤去作業でも、それは同じように感じました。元々畑であった場所にはさまざまな物が埋まっていた。表面をきれいにして「きれいになった」ということにするのは嫌でしたが、そうして物を取り出せば、質の土なども混ざって、元のよう



た。これからどうしたら良いか。とおっしゃっていたことから、仮設住宅に入居できたからと言って、安心して生活を送れるとは限らないと痛感しました。

これから真冬の季節へと変わっていきます。暖をとるものが欲しいという声が多かったことから、積極的な物資の支援が必要だと思いました。

2つめは、人々との出会いです。石巻に住んでいる方ももちろんですが、全国から来ているボランティアの方、学生参加者などに関わることで、喜び、そして人の温かさを感じました。

お話をされながら流された涙を見て、このような思いをされた方が、何人も何人も、いるのだと実感して、被害の果てしなさを感じました。

また、がれき撤去作業でも、それは同じように感じました。元々畑であった場所にはさまざまな物が埋まっていた。表面をきれいにして「きれいになった」ということにするのは嫌でしたが、そうして物を取り出せば、質の土なども混ざって、元のよう

す。被災者の方とお話をし、私は話を聞くだけで辛い思いになったのに、思い出すだけで痛い思いをするだろうに話してくださって、知らせてくださって、本当にありがとうございます。

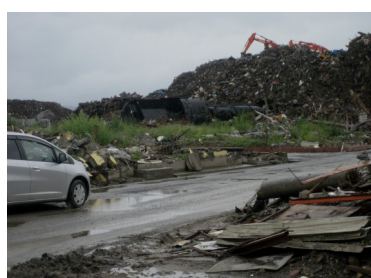
私は3年生というところで、将来どのような職業に就きたいのか悩んでいます。活動を通して、地域でのネットワークを構築していく仕事に就きたいと気づきました。

瓦礫が撤去されている地域は家の跡がたさに残っていないのが現状です。震災の残した爪痕は大きく、以前は人々が当たり前のように生活していたのだと思うと心が痛みます。これから、どのような支援が必要になっていくのか先を読み取った上で、私にできることを精一杯行っていきたいです。

瓦礫が撤去されている地域は家の跡がたさに残っていないのが現状です。震災の残した爪痕は大きく、以前は人々が当たり前のように生活していたのだと思うと心が痛みます。これから、どのような支援が必要になっていくのか先を読み取った上で、私にできることを精一杯行っていきたいです。

かかると、身をもった。ボランティアに行き、自分ができたこと、得させてもらえたことの方が、とても大きかったです。

飯田女子高校出身



(上田西高校出身)

経済学部 教職チームと高遠高校

「高遠の魅力」を再発見！

11月19日、日本福祉大学第59回大学祭において、高遠高校情報ビジネスコースの25名の生徒による『高遠の魅力』の発表会がおこなわれました。

この発表会は今年5月からほぼ毎月1回のペースで本学経済学部の教職チーム(中高の教員を目指す学生による自主的な学習会)の学生と高遠高校の同コースの生徒とが共同で「高遠の魅力」再発見に取り組んできたことを基礎にしています。学生と高校生が一つのテーブルにつき、「高遠の桜」、「城址公園」、「温泉」、「ローメン・高遠饅頭」、「地酒」などのテーマを決め、夏休みには1泊2日で教職チームのメンバー10人が高遠高校で合宿を行い、テーマごとに学生と高校生の合同チームをつくり、実地調査も行ってきました。

そして最後は高校生たちの手によってまとめられ、今回の発表に至ったものです。会場となった12号館には、経済学部の教職員、学生、そして一般の人の姿も。

初めての経験に高校生も緊張していましたが、その発表内容の水準は高く、学生からは、「合宿後の限られた時間にもかかわらず、その内容が深まっていることに驚いた」という声があり、高校生からも、「大学の先生達も聴いていて、ドキドキしたけど、やってよかった」、「今度は地元で発表会を」などの声が寄せられました。



高遠高校と日本福祉大学は、平成23年7月に「連携協定」を結びました。連携して教育の充実発展にとり組むためです。学生が協力した今回の高校生のプレゼンテーションは、その連携の第一歩となりました。

協定十周年を経て、さらに連携を(宮田村) 近藤副学長が「子育て支援講座」に

また宮田村との連携では、11月のリンゴ収穫祭に、経済学部の学生を中心として15名の学生が参加し、同学部の学生が開発に関わった「のせる醤油」「福だまり」の販売などを行い、好評を博しました。収穫したリンゴはいまや美浜キャンパスの新ブランドの「アップルポテトパイ」に生まれかわります。

また宮田村との連携では、11月のリンゴ収穫祭に、経済学部の学生を中心として15名の学生が参加し、同学部の学生が開発に関わった「のせる醤油」「福だまり」の販売などを行い、好評を博しました。収穫したリンゴはいまや美浜キャンパスの新ブランドの「アップルポテトパイ」に生まれかわります。

12月4日、11日の2日間、宮田村教育委員会主催の「子育て支援講座」が開かれ、近藤直子副学長が講演を行いました。



してきています。



また初めての試みとして、大学の学生サークル「弦楽アンサンブル」が演奏会を開きました(写真)。参加した学生10人の中には長野県出身の3名の学生も。学生の自主的な地域研究活動から始まった村と大学の交流は、さらに農村と都市を結ぶ活動や農産物の加工と流通など新たな広がりをもった連携事業へと発展

11月13日、宮田村と日本福祉大学が友好協力宣言を交わして十年となった記念の式典があり、連携事業に貢献された関係者の顕彰が行われ、引き続き開かれた児童作家 角野栄子さんの講演会には、二五〇名の参加者がありました。

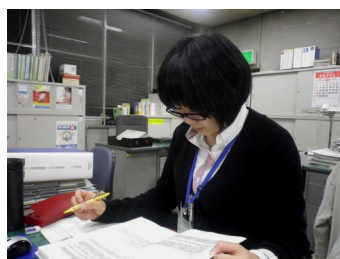
私の仕事

「福祉大卒業生はいま」

今いる場所のできる限りの経験を

長野県上田保健福祉事務所

赤津 福祉課
由佳子



日本福祉大学を卒業し、長野県職員として働き始めてから半年が過ぎました。社会福祉職として採用されたので、私は当然、ケースワークの仕事がある職場への配属になるだろうと考えていました。しかし、私が配属された事務所は、県の保健福祉事務所の中で唯一、ケースワーク業務がない事務所でした。

大学時代の友人たちがそれぞれ現場でのスタートを切っていたため、始めはケースワーク等、社会福祉職ならではの経験ができないことへの不安や焦りもありました。

正直今もその気持ちは少なからずあります。しかし、今自分が担当している業務では、学生時代に勉強したつもりになっていた福祉関連の法律や制度とほとんど向き合います。勉強したつもりでいたけれど、ほとんど理解できていませんでした。やはり、実際にその法律や制度を使う立場になってみて、本当の意味で内容について勉強していると感じています。

「支援を必要としている人と関わるなら、様々な制度を理解していなければより良い支援につなげられないかもしれない。だから、今は実際のケースに触れることはなかなかできなくても、できる限りいろいろな制度に触れ、勉強していこう」と考えるようになり、また、かといって制度ばかりの人間にならず、支援を必要としている人や実際に現場で働いている人と同じ方向を見て関われるよう、初心を忘れず、今の職場で学べることはどんな経験し、自分の中へ吸収していきたいと思っています。

① 松本県ヶ丘高校出身

② 社会福祉学部 社会福祉学科卒

北信越地域 就職相談会を開催

氷河期をのりこえる



と、とくにハローワークには長野の求人データが蓄積されているので、ここを活用してほしいことを強調されました。

長野県は第一次、二次産業の比率が高く、第三次産業従事者比率は、都道府県別では第47位となっており、観光振興はじめ、長野県全体で新たに開拓すべき課題があることが示されました。

求人状況については、0.74倍と、全国平均を上回っているものの依然厳しい状況にあるが、それぞれの専門分野を活かす道が必ずあるので、ぜひ県出身のみなさんには長野に戻ってきてほしいこと、

長野県庁からもアドバイザーが相談会では、まず長野県労働雇用課の富沢さんから県内の雇用動向等の説明を受けました。その中で、長野県経済は平成19年には、製造品出荷額が過去最高の7兆円を超える水準に到達したが、リーマンショックの影響を受けて急速に落ち込み、その後持ち直し、今年は大震災の影響は大きいと思われるが、引き続き回復途上であり、電機、情報、電子分野を中心に健闘していること。一方、就業分野を見ると、長野県は第一次、二次産業の比率が高く、第三次産業従事者比率は、都道府県別では第47位となっており、観光振興はじめ、長野県全体で新たに開拓すべき課題があることが示されました。

長野県庁からもアドバイザーが相談会では、まず長野県労働雇用課の富沢さんから県内の雇用動向等の説明を受けました。その中で、長野県経済は平成19年には、製造品出荷額が過去最高の7兆円を超える水準に到達したが、リーマンショックの影響を受けて急速に落ち込み、その後持ち直し、今年は大震災の影響は大きいと思われるが、引き続き回復途上であり、電機、情報、電子分野を中心に健闘していること。一方、就業分野を見ると、長野県は第一次、二次産業の比率が高く、第三次産業従事者比率は、都道府県別では第47位となっており、観光振興はじめ、長野県全体で新たに開拓すべき課題があることが示されました。

12月3日、高校、大学の就職内定率が6割台という厳しい状況のもとで、長野県出身でUターン就職を希望する学部3年生を対象に、就職相談会が美浜キャンパスで開催されました。学生長野県人会と同窓会当日は愛知県全体の実習交流会や全国的なボランティア活動の研究会など、さまざまな取組が重なるなか、社会福祉分野を中心に、30名をこえる学生が参加しました。



これから本格的に始まる就職活動についての心得を話すキャリア支援担当者。

キャリア支援の担当者からは

続いて長野県へのUターン希望学生を支援している職員からは、「公共の職業紹介の活用」がとくに重要だ、として、いわゆる「大手」「人気」企業に殺到する雰囲気、にのみこまれず、自分の頭で考えて、「長く、安心して働ける」企業、法人を発見することが必要で、そのためには、何といつても地元の情報を大事にすること、その点からいってもハローワークの活用は決定的に重要だ、と強調しました。

またいわゆる「地元企業」といつても、日本福祉大学の卒業生がいたり、関わりがある企業や法人からは大学に求人票が届いているので、キャリア開発課の情報は徹底的に活用すること

またいわゆる「地元企業」といつても、日本福祉大学の卒業生がいたり、関わりがある企業や法人からは大学に求人票が届いているので、キャリア開発課の情報は徹底的に活用すること



先輩(右)からのアドバイスを真剣に聞く3年生。

が大事だ、という指摘も。またこれからの就職活動が、自分の専門分野の研究を深める時期と重なることから、就職活動を成功させる基礎の基礎は学習の蓄積を忘れずに取り組もうと呼びかけました。このためには、企業、法人の研究と併せて活動計画を立てることが大切で、いたずらにあせて〇〇ナビのエントリーだけに時間を費やすのは得策ではない、とも。こうしたアドバイスをもとに、後半はもつぱらOB、OG、4年生の内定者との個別相談を行い、「いろいろ迷っていたが、長野に戻すためにがんばりたい」、「何から手を付ければ良いか、あせっていたが、ぜひ自分の専門分野で初志を貫きたい」、「児童分野は特に厳しいけれど、挑戦したい」など、気持ちを新たにしていました。

みんなで頑張つて

信州に帰ろう！

一人でも多くの人に笑顔を、

一歩を踏み出すお手伝いを

長野県障害者福祉センター サンアップル

総務課 佐藤 ゆり子

長野県社会福祉事業団に就職して早20数年がたちました。コロナと呼ばれた西駒郷から始まって、水内荘、事務局勤務を経て、現在は長野県障害者福祉センター(愛称:サンアップル)に勤務しています。

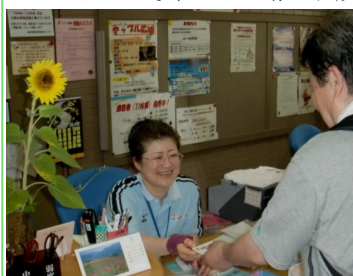
サンアップルは、障害のある方の健康の増進と社会参加の促進、障害のある方ない方双方の理解と交流を進めることを目的としており、障害の有無を問わず利用が可能です。

具体的には文化・スポーツ面からの支援を提供しています。私が支援員として長く勤務してきた直接サービスを提供する事業所と違い、誰もが自由に利用できる施設であるため、障害のある方への配慮は当然ありますが、障害のない方も含め、少しでも多くの方に利用していただくにはどうしたらいいか、リピーターになつてもうには何が必要か、常に考え、実践し続けるという点では商業的なサービス業に近い側面も持っているところです。

とはいえ、やはり人間を相手にする職場であることには変わりはありません。何気ない会話に心がほつりしたり励まされたりした体験はありませんか？

サンアップルに着任して改めて実感していることは、人間は一人では生きられない生き物だということです。ここでは自分のケースというものを持たないため、一抹の寂しさもあります。が、反面適度な距離も保ちやすくなります。そうすると、たとえ強がってはいいても、人間はどこかで誰かとつながっていたいと切望するものだということがよくわかります。それは障害の有無に関わらず、また本人がそうとは自覚していない場合もあり、そういうことも含めて丸ごと受け止め、誰かの心の支えなり居場所なりを提供できるセーフティネットとして、自分の役割が果たせればと思います。

一人でも多くの人に笑顔を一歩を踏み出すお手伝いを。間接的であれ直接的であれ、人と真摯に向き合い、寄り添っていける職員でありたいと思います。



①須坂高校出身
②社会福祉学部 社会福祉学科卒

写真と「ふくし」-木之下晃氏が特別講義-

11月22日(火)の社会福祉学部「地域福祉論Ⅱ」(担当:平野隆之教授)に、写真家で本学客員教授の木之下晃さん(本学卒業生)をゲスト講師としてお招きしました。

長野県諏訪市出身の木之下さんは、同県の茅野市美術館が開催する写真展「寿齢讃歌ー人生のマエストロー」を企画・講評しています。これはおおむね80歳以上の方を被写体として、そこに写しだされるお年寄りの表情から、見る人々に生きがいと元気を感じ取っていただく、というものです。この写真展を、11月19日(土)～26日(土)の期間限定で本学美法キャンパスでも開催することになり、母校を訪れた木之下さんのゲスト講義が実現しました。

木之下さんは「私の祖母は江戸時代の生まれで、坂本竜馬と同年です。その祖母から私、そして学生の皆さんへと語り継ぐことで150年もの歴史がつながることになります」と話し始めまし

た。そして寿齢讃歌写真展の作品をスライドショーで見せながら「ここに写っている人々の姿・服装は、その人たちの時代と文化を伝えています。あなたたちがこの年齢になったとき、同じ姿にはならないはずですよ」と続けました。「世界中どの民族も、家族の写真を持っています。写真には、その人の歴史や魅力、様々なものを伝える力があります。皆さんもお年寄りの生き生きとした姿を写真に撮ってください。撮られる人と見る人、みんなが元気になります。それも福祉のあり方の一つだと思いませんか?」と語りかけ、受講した学生たちはうなずきながら聞き入っていました。

(大学HPより)



講義する木之下 晃氏

写真は有力な

「マルチケース」の方法

講義のなかで木之下先生は、大学の講義を通じて学んだこと以外に、さまざまな社会的関心を持った事象について懸命に自分で学んだことをあげ、それらすべてが自分の現在に様々な影響をあたえていること、学生時代こそなにもにとらわれず、学ぶことに情熱を傾けてほしいと呼びかけられました。

そして高齢者写真展の応募作品をスライドで紹介しながら、写真展を構想した直接のきっかけは、九十歳を越えてなお活躍された指揮者 朝比奈隆氏から、「長生きするってことは、最高の芸術だ」ということを聞き、そのことに深く感動したこと、茅野美術館と市民団体がこの構想に共感し、今日まで6年間にわたって共同の取組が重ねられてきたこと、日本福祉大学が後援団体として加わったことなどを話され、学生に対し、実習やボランティアなどさまざまな機会にお年寄りにカメラを向け、語りかけて欲しいこと、「写真は記録として、記憶としての役割だけでなく、撮影を通じて、お年寄りの方々とコミュニケーションをとることができるものだということを熟く語りかけられました。

講義後の学生の感想文には「写真の持つ力を感じた」、「お年寄りの方々の表情がすばらしかった」などの感想が寄せられました。

諏訪清陵高校から日本福祉大学へ

木之下晃氏は諏訪市出身。諏訪清陵高校から日本福祉大学に進み、中日新聞社、博報堂を経て、フリーのカメラマンとなり、ライフワークとして、マエストロ(巨匠)と呼ばれる世界の音楽家の演奏写真を撮り続けてきました。

音楽家との強い信頼関係を築いてこれられ、指揮者小澤征爾氏とは新進の時代から交流があり、小澤氏の著作に使用され

茅野市美術館の高齢者写真展

毎年、9月初めに行われるもので、コンクールではない公募制の写真展。被写体は、おおむね80歳以上の方となっている。

主催は美術館だが、運営を担っているのは美術館を支援する市民団体であることも大きな特徴。

今回、11月19日～26日まで初めて館外展として、日本福祉大学美法キャンパスで行われたのも、この特別展の企画、運営に学生県人会が関わったことがポイント。



「茅野市美術館「寿齢讃歌」in美法は、2011年11月19日(土)～26日(土)まで、美法キャンパス50周年記念館で、開催されました。

今年も絶好調！長野県人会 模擬店



信州のリンゴは甘い蜜がたっぷり詰まっています。

11月19日(土)・20日の大学祭では、学生長野県人会が毎年恒例の、宮田村のリンゴの即売とトン汁の模擬店を出店。

初日は雨&強風の中での販売となりましたが、多くのお客様に来場していただき、冷えた身体を温めてくれるトン汁は大人気！今年もお昼過ぎには完売となってしまいました。

写真展設営に協力した学生たち。

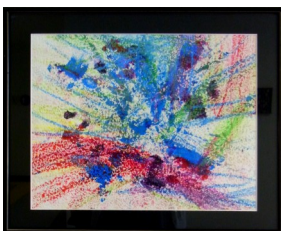


表情豊かな、おじいちゃん・おばあちゃん。

現在、12号館3階の特設コーナーで写真(一部)を展示しています。

第4回 障害者施設のアート展 - ‘木工表現、とカレンダー原画展’を開催

12月1日から、美浜キャンパスで第4回障害者施設のアート展が開かれています。前回は、松本盲学校の「書の世界」展でしたが、今度は豊かな色彩をともなった絵画と木工の作品展です。



2012年のスタートは『閃華』から

作者は松本市の知的障害者施設「四賀アイ・アイ」の利用者の皆さんです。同施設で今回作られたカレンダーの原画は、すべて利用者の作品。線を描くことができない方は、画用紙を塗りつぶすような暖かいオレンジの色彩表現で、その心を表現しています。また同じように重度の障害を持つ方の作品は、中心部からほとぼしるような色彩が描かれています。まさに絵画が、その人の心を外に向かって表現するものになっています。

今回はまた、これまで紹介してきた紙に書かれた作品ばかりでなく、『木工絵画』とされているように、四賀アイ・アイの中で、実際の作業「働くこと」そして取り組まれた活動の中から生まれた木彫作品を紹介しています。

糸ノコの機械操作、細かな釘打ち作業などを通じて得られた「作品」は、鑑賞され、評価されることで作者の表現意欲を高めます。障害者の働く力の形成に、表現活動は大きな役割を果たしているのです。



2月の原題『はつ恋』

カレンダーには、三才山病院（上田市）の利用者の方々の詩も掲載されており、両施設のコラボレーションによって、2012年のカレンダーが完成しました。



いくつかの作品を紹介しましょう。一人ひとりの作者の活動を支える支援員の工夫も見ておきたいところです。よく見ると、一本一本の釘の頭が色づけされています。手先が不自由な人でも色を塗ったりすることができる、そんな知恵を絞っているのです。

これらの作品は、もちろん個性的なものですが、それを利用者同士が、また支援員が支援しているという点では、一種の共同作業としての表現行為といっても良いと思います。



【たそがれの街】

初期の、木工一糸ノコの操作訓練から生まれた作品。板を切った不思議な線に注目して、色を塗ったり、さらに細かな手先の訓練へと、板に釘を打ち込む中で、「ビルの夜景」が誕生しました。



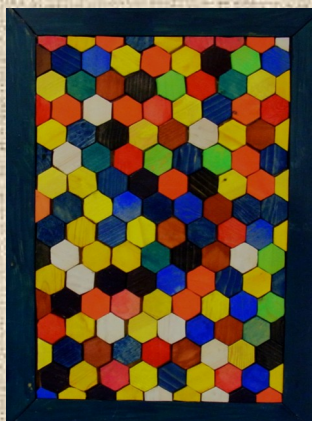
【銀河】

線は、タテやヨコばかりではありません。斜めに切られた板からは、夜空が生まれました。天の川が多くの街の夜空から消えましたが、遠い銀河の世界が空の奥に広がっています。



【フォレスト】

原作はほぼ4倍の大きさでした。これを縮小して、グラデーションの配色や明暗を何種類も作ってお互いに見比べてきたそうです。現実と表現された世界の間に、それぞれの人の認識世界が広がっています。



【ヘキサゴン】

色づけされた、木の15ミリ角のヘキサゴンを組み合わせて表現されたもの。

ある人はお花畑のようだと言ひ、また別の人は心象風景だとも。見るだけでなく、何だか自分もいろいろ木片を組み合わせたくなる、創造へのいざないを感じさせます。

四賀アイ・アイは、福寿草と松茸と化石の郷、松本市最北部の四賀地区(旧四賀村)に平成5年に開所した障害者支援施設です。
“知的障害”と呼ばれる方の持つ人との優しい関わりや楽しさを伝えたく、“であい・ふれあい・めぐりあい”を基本理念に、創立されました。

障害者支援施設 四賀アイ・アイ
〒399-7417
長野県松本市刈谷原町759-1
TEL(0263)64-4040 FAX(0263)64-4400

県内で願書受付！！

2012年度の入試より、手渡し+面談で入学検定料が10,000円割引される出願方法「持参割」が新たにスタートします。持参割の願書受付会を下記の日程で松本オフィスで開催します。

※持参割は一般入試、大学入試センター試験利用入試の出願が対象となります。



- 日時：2012年1月21日（土）13:00～16:00
- 会場：日本福祉大学松本オフィス ※予約不要
- 当日は、検定料は未入金のまま、出願書類（記入済、写真貼付）をご持参ください。

※上記の日程で都合がつかない方、または平日に持参を希望される方は、事前に松本オフィスまでご連絡をお願いします。県内各地で受付あり。

【12月29日（木）～1月5日（木）の期間は、閉館となります】

※その他、詳細につきましては大学HPまたは、
入学広報部（0569-87-2212）までお問い合わせください。

長野県地域同窓会より 総会 & セミナー開催のお知らせ

長野県地域同窓会では、下記の日程で平成23年度長野県地域同窓会総会&実践報告発表会のセミナーを開催します。

当日は、本学社会福祉学部 准教授の原田正樹先生をお迎えし、講演会も開催します。

在学生、同窓生をはじめ、一般の方も聴講可能ですので、皆さんのご参加お待ちしております。

その他、中信地区支部発足会も開催しますので、中信地域のお住まいの同窓生の皆さんは、ぜひご参加をお待ちしています。

ご不明な点に関しては、松本オフィスまでお問い合わせください。



■日時：平成24年2月26日 12時30分～

■場所：松本勤労者福祉センター（予定）

詳細が決まりましたら、松本オフィスBlogで、随時お知らせをしますので、ご覧下さい。

2012年度 入試インフォメーション

◆大学入試センター試験利用入学試験

日程	方式	出願期間	合格発表
前期	全学部出願型	12月26日(月)～1月13日(金)	2月16日(木)
	2教科2科目型 3教科3科目型 5教科5科目型	1月5日(木)～2月1日(水)	
	後期	2教科2科目型	

◆一般入学試験

日程	方式	出願期間	試験日	合格発表
前期	A方式(3教科型) B方式(2教科型)	1月5日(木)～27日(金)	2月3日(金)・4日(土)・5日(日)	2月16日(木)
後期	M方式(2教科型) センタープラス方式	2月17日(金)～3月2日(金)	3月9日(金)	3月15日(木)

※入学試験の内容については、再度「受験ガイド2012」・「入学試験要項」を必ずご確認ください。

※入試に関して、ご不明な点がございましたら入学広報部（0569-87-2212）または、松本オフィスまでご連絡ください。

◆文化・芸術系部活動など推薦入学試験

◆スポーツ推薦入学試験

後期日程	出願期間	試験日	合格発表
文化・芸術系 部活動	2月8日(水) ～ 16日(木)	2月19日(日)	2月22日(水)
スポーツ 一般		各サークル 指定による	
スポーツ 指定種目			

※指定種目枠の試験日は、本学サークル部長等の指示によります。また、練習会への参加が必要となる場合もあります。



高校生向け進学相談会を開催します。

■飯田会場

日時：1月26日(木) 16:00～18:00

会場：シルクホテル

■松本会場

日時：2月18日(土) 13:00～16:00

会場：日本福祉大学松本オフィス

詳細は、大学HPをご覧ください。



日本福祉大学 北信越センター松本オフィス

〒390-0815 長野県松本市深志1-1-24 中村不動産ビル3階
TEL (0263)31-9011 / FAX (0263)32-8018
E-mail e-matsumoto@ml.n-fukushi.ac.jp

日本福祉大学HP

<http://www.n-fukushi.ac.jp/>

松本オフィスBlog

<http://blog.n-fukushi.ac.jp/bc-matsumoto/>



松本オフィス